

## ⑭高月地区(山都町)

月いづる里の挑戦  
～若人に繋げる農地をみんなの力で～

ビジョン策定年度:平成30年度 目標年度:令和4年度



## 1. モデル地区のプロフィールと現状

### ◆農業者に関する状況

・総戸数	36戸
・総人口	93人
・農家戸数	26戸
・農業者数	52人
・担い手数	31人
・65歳以上の農業者数	19人

(平成30年度)

平成30年住民基本台帳  
平成30年住民台帳

### ◆農地に関する状況

#### (1)面積区分

・水田	20.7ha
・畑(樹園地除く)	41.4ha
・畑(樹園地)	4.0ha

#### (2)筆数

・水田	230筆
・畑(樹園地除く)	277筆
・畑(樹園地)	13筆

#### (3)作付区分

- ・水田 水稲(ヒノヒカリ、アキゲシキ)
- ・畑(樹園地除く) ミニパプリカ  
里芋、ニンニク
- ・畑(樹園地) 栗

#### (4)耕作放棄地 あり

### ◆基盤整備に関する状況

- (1)ほ場整備 11ha整備済
- (2)耕作道路 幅員が2.0m未満
- (3)排水 土水路
- (4)用水 水路から直接取水

### ◆集落の現状

- 作業困難な場所や人手不足もあり、草刈りが間に合わない・追いつかない。
- 収益が上がる作物がない。
- 働く場所が少なく、子供は大学等で外に出て、帰ってこない。
- 耕作放棄等による荒れ地が多くなり、イノシシの住処となっている。





## 2. ビジョン策定のプロセス

### (1)ビジョン検討のスタートに向けて

高月地区では、条件不利地に耕地が点在していることや、農家の高齢化、後継者不足、鳥獣被害(イノシシ・シカ)の増加により、個人では農地の維持管理が難しい状況である。

そこで平成27年3月に「人・農地プラン」を策定。さらに、その実現に向けて、同年4月、「高月の明日を考える会」を設立し、会議を毎月重ねていった。

「高月の明日を考える会」での活動が、その後の「農事組合法人 高月」の設立、中山間農業モデル地区支援事業へとつながっていったのである。



高月地区は、狭い耕地が点在する複雑な地形が多い

### (2)先進地視察・研修による学び

「高月の明日を考える会」では、集落営農セミナーへも参加、先進地視察研修などを行った。

1番参考になったのは、山鹿市鹿北町の農事組合法人「結の里浦方」への視察である。

浦方地区の面積は3町程。わずか5名で法人化した理由は、「もう時間がない。地域の人たち全体の理解を得るために待っていても自分たちのエネルギーが持たない。ヤル気のある5名で法人を立ち上げ、それを基盤に集落全体を引っ張ろう」というもので、見切り発車という見方もあったが、最後はリスクを背負うリーダーの決断力だと学んだ。

平成28年4月、地域の農地は地域で守ることを基本理念に、19名の農家で「農事組合法人高月」を設立した。



農事組合法人高月の設立

### (3) 農業ビジョンの策定

平成30年度、中山間農業モデル地区支援事業の指定を受け、農事組合法人高月が地域の核となることを位置づけた。

平成30年7月～平成31年1月に6回開いた検討会には、地元の方と町役場職員または県職員が来られて、指導して下さった。検討会では山形大学地域教育文化学部の楠本健二先生の指導でワークショップを実施。数多くの意見が出たが、課題は下記の3つに集約された。

- 耕作放棄地が増えている
- 農業後継者がいない
- 有害鳥獣による農作物被害が多い



高月集落センターでの検討会の様子



#### ◆モデル地区農業ビジョンの検討の流れ

番号	日付	場所	話し合いの内容	参加人数
1	H30.7.10	高月集落センター	県、町から事業についての説明	7人
2	H30.8.7	高月集落センター	今後のスケジュール等について 農業ビジョン(案)作成方法について 先進地研修について	7人
3	H30.11.6	高月集落センター	今後のスケジュール等について 農業ビジョン(案)について 先進地研修について	6人
4	H30.12.4	高月集落センター	農業ビジョン(案)について 先進地研修について	5人
5	H30.12.12	高月集落センター	農業ビジョン(案)について	5人
6	H31.1.8	高月集落センター	農業ビジョンについて	6人

### 3. 集落の「課題」と「将来像」

#### ◆集落の課題

- 耕作放棄地が増えている
- 農業後継者がいない
- 有害鳥獣による農作物被害が多い



#### ◆集落の目指す将来像

- 農業で生活ができる収入の確保
- 若者が多く、子供の多い集落
- 有害鳥獣の農作物被害の防止
- 地域資源を生かした活性化



#### ◆成果目標

- 小ネギの作付30a
- くり園の拡張による耕作放棄地の解消1ha

#### (1)すべてがつながっている課題

ビジョン検討会の議論で、課題は3つに集約された。しかし、これらの集落の課題はすべてつながっていると認識している。

高齢化により耕作放棄地が増え、藪などひそみ場が増えたため、イノシシが繁殖。耕作放棄地の近くの田畑はエサ場として集中砲火を浴びる。野菜・米・トウモロコシ・牧草など、すべて食べられてしまう。獲っても獲っても個体数が減らない。しかし農業後継者がおらず、対策する人手が足りない。

高齢化、耕作放棄地の増加、鳥獣被害の悪化、後継者不足による対策作業の不足。これらの悪循環が続いているのである。

#### (2)新たな課題

上記のような課題認識は現在も変わっていない。これ以上に新たに加えるべき課題は、今のところはない。

## 4. 取り組み状況

### [ビジョンの内容]

#### (1) 農業で生活ができる収入の確保

- ◆ 農地集積、基盤整備等により作業の効率化
- ◆ 農業機械、施設の共同整備によるコスト削減
- ◆ 小ネギの導入による収益と雇用の確保
- ◆ 米直売の販路拡大

#### (2) 若者が多く、子供の多い集落

- ◆ 農事組合法人 高月の雇用による後継者の育成
- ◆ 空き家を活用した移住促進

#### (3) 有害鳥獣による農作物被害の防止

- ◆ 重機や乗用草刈り等の導入による耕作放棄地の解消や草刈り作業の効率化
- ◆ クリ園の拡張による耕作放棄地の解消
- ◆ 動物(ウシ、ヤギ等)の放牧による草刈り作業の軽減
- ◆ 農地の集団化等による効率的な鳥獣害対策の実施
- ◆ 罠設置数の増加

#### (4) 地域資源を生かした活性化

- ◆ 地蔵88体の整備による地域資源化
- ◆ フットパスによる都市、農村の交流
- ◆ 農産物直売所、農家レストランの設置
- ◆ 観光農園(たけのこ園、カブトムシ園、栗拾い園等)の設置
- ◆ 景観作物の植栽
- ◆ 再生エネルギー発電(木質ペレット、メガソーラー)による収入確保基盤整備の実施

### [各項目の取り組み状況]

#### (1) 農業で生活ができる収入の確保

##### ◆ 取り組みの状況と成果

##### [水稲その他について]

◎ 基盤整備による作業の効率化について、畑はある程度、基盤整備済み。水田は広くて機械を入れられる田と、点々とある小さな水田がある。

◎ 農事組合法人高月の作付面積は、平成29年3月時点で水稲210a、畑は里芋20aとニンニク10aと、合計わずか240aで立ち上げた。

平成30年3月は水稲300a、里芋30a、ニンニク20a。頼まれたクリが110a、飼料牧草110aで合計570aと倍以上になった。

平成31年3月は水稲500a、里芋30a、ニンニク30a、クリ100a、ミニパプリカ5aで合計665a。

令和2年3月計画では水稲560a、里芋30a、ニンニク30a、栗125a、小ネギ20a、ミニパプリカ5aで合計770a。しかし予想以上に高齢化が進み、組合員たちが水稲を頼んでこられたため、水稲640aに増えている。

◎ 昔は湧水米で、土地柄もよくて美味しいお米がとれていて、高値で取引されていた。しかし人数が減り高齢化する中で、米直売で販路拡大したい。当初はJAだったが、大体30kgあたり9,000円の相対取引を考えている。

日奈久の温泉旅館(親戚)に年間100～150kgを販売。また熊本市内の居酒屋や弁当屋、組合員の親戚など縁故米を販売している。美味しいから口コミで広がっていった。

◎ 米の収量を増やしつつ、販路を拡大しなければならない。法人を対象にしたセミナー等で情報収集する。



## [小ネギの導入について]

◎小ネギのハウスを設置した。コンバイン、トラクター、田植機、ブロードキャスター、小ネギ皮むき機(エアと水を使用)、コンプレッサー、乗用草刈り機、機械倉庫、米貯蔵庫、管理機など共同購入し、コスト削減。米専用の保冷庫で保管すれば、年間安定供給できる。

◎小ネギは割と収量があり、軽いため高齢者や女性でもできる。ハウスで周年栽培ができるので、人が雇えるのではないかな。

平成30年度でハウス整備(20a)、平成31年度に栽培開始。令和2年3月から収入が見込め、同年4月から雇用開始の予定。



旧清和村では初めての小ネギの導入  
令和2年3月からの収入、雇用開始が期待される

## ◆解決すべき課題

◎山付きで狭く、平坦ではないため危険性が高い。国や県の基盤整備事業を活用する条件に満たないのが現状だが、水田と道路と水道の整備をしないと、若い人は稲作をしなくなるのではないかなという課題もある。

◎標高550m~600mの高台なので、畑作が水田の2倍の40町ある。かつては牛の飼料としてトウモロコシなどを植え、農畜連携の営農だったが、畜産がだんだん回らなくなり、畑の維持をするために、キャベツなどを少し作るようになった。令和2年度、余力があればキャベツ・大根など土地利用型の作物の導入を検討する予定である。

## ◆今後の方針

◎国の基盤整備事業の条件が緩和された時に、すぐ提出できるように、計画だけでもきちんと作成する。

◎キャベツに不向きな土地には、クリや果樹を植えて畑を維持する。

◎小ネギは主に市場出したが、将来的には有機栽培にし付加価値をつけて、こだわりの商材を売るグループを通して相対取引したい。

◎令和2年度の事業でハウスをあと2反増やす予定だが、4反で目一杯。目標は10aあたり年300万円。年間、1000万円に持って行きたい。

◎農事法人のない集落から、1町2反ほど「米を作って」と委託を受けた。もともと自分たちの高月集落に限った農事組合法人だったが、課題はどこも同じなので、余力があれば、他地区の委託も法人で受けていきたい。

## (2)若者が多く、子供の多い集落

### ◆取り組みの状況と成果

◎法人は65歳と67歳がメインで、あとは70～80代だが、地元に住む40歳男性(元会社員)を、令和2年4月から雇用する。5、6年前に父親が亡くなり、母親と二人では畑仕事ができないため、法人が委託を受けていた。彼は「地域のために頑張る法人を加勢したい」と、会社を辞めて、熊本県立農業大学校の新規就農者支援研修生(プロコース)で1年間勉強した。

◎空き家がとても多いため、山都町がリフォーム代70万円を補助。利用する旧阿蘇郡蘇陽町は観光と合わせて、移住が多い。旧上益城郡は阿蘇ほどのブランド力はないが、変化して来た。

### ◆解決すべき課題

◎Iターン・Uターン者は多く、古民家カフェなどを経営する人はいるが、移住して就農する人はまだない。

### ◆今後の方針

◎都市部との交流を続け、田舎の良さを感じてもらうことで、移住の一助とする。その前に、若い人が就農したくなるように基盤整備を行う。

◎地元の若い人を雇うことができたのは有難いが、一般公募でも雇えるくらいの給料が払えるようにしたい。

## (3)有害鳥獣による農作物被害の防止

### ◆取り組みの状況と成果

◎少し前まで鹿の鳴き声が聞こえていたが、捕獲されたのか最近は聞かない。イノシシは雑食性なので、何を植えても食べられる。以前、町で電気柵をレンタルしていたが、電気柵、電気箱穴など対策しても、効果はなかった。

◎クリは下草刈りや剪定は必要だが、米と違って毎年植えずに済む。県の補助を活用し、人手や資金など検討しながら拡張し、耕作放棄地を減らしたい。

◎重機や乗用草刈り機等を購入したので、耕作放棄地の解消や草刈り作業の効率化を図る。また点在している農地を集団化し、効率的な鳥獣害対策をしたい。

### ◆解決すべき課題

◎イノシシが国道など道路にも飛び出してくるため、夜は衝突事故ばかり。人がいる環境にも慣れ、昼間も活動している。イノシシの栄養がよくなり、出産が年2回から3～4回に増えた。山都町で年6000頭捕獲しているが、減らない。

### ◆今後の方針

◎ハンターが高齢化し、鉄砲はやらなくなっている。イノシシ対策としては、罠の数を増やすしかない。



#### (4)地域資源を生かした活性化について

##### ◆取り組みの状況と成果

◎フットパスは町外の参加者が多いので、地蔵88か所巡りも合わせてコースを作り、観光資源化。外輪山や阿蘇谷を眺め、みんな感動している。

フットパスのランチと合同で、毎年11月23日に大収穫祭を開催。参加料2500円で定員20名を25名に増やした。好評のため令和2年は30名に増やせないかと相談されている。



明治23年に建立された地藏尊  
地区内に多くの地藏尊がある



湧水やおいしい料理が  
好評の大収穫祭

◎地元の食材メインで婦人会が作るランチは好評。新米を注文される方もいる。70名ほどの都市部の人と交流する機会がめったにないので、大収穫祭は活性化にもつながる。後日、個人で山都町を歩きに来るリピーターもいる。

◎子供の頃、家族で遊びに来ていた若者が今はボランティアとして参加してくれる。そのように、観光客から手伝う人も出てくるかもしれない。都市部との交流を続けたい。

◎農産物直売所はなし。観光農園(たけのこ園、カブトムシ園、栗拾い園等)は、未設置。

◎景観作物の植栽および、再生エネルギー発電(木質ペレット、メガソーラー)による収入確保基盤整備は、まだ行っていない。

##### ◆解決すべき課題

◎大収穫祭で調理した女性たちに1000円ほど渡すが、手間を考えると、無償に近い。お客さんの喜ぶ姿で満足しているが、現金に換算した場合の様々な問題も考慮しなくてはいけない。

◎フットパスは秋のみだが、受け入れ態勢が整えば、春にも開催できる。新緑の頃のイベントを考えていかななくてはならないが、まだそこまでは具体的には進めていない。

◎好評の大根の漬物を商品化し、米とのセット販売を考えているが、女性たちが農作業の調整に追われ、加工食品を作る余裕はない。加工設備にもお金がかかる。

##### ◆今後の方針

◎高台から眺めた月がきれいなのが、「高月」地区の特長。それを活かした夜の取組を考えなければいけない。蛍も飛ぶが、蛍よりも月がきれい。

◎他にもアイデアはあるが、人員が足りないので、着手できない。10年で安定的な経営の基礎固めをして、次の世代に受け渡したい。

## 5. まとめ:成果と今後の展開方向

### ◆成果目標

- ・小ネギの作付30a
- ・くり園の拡張による耕作放棄地の解消1ha

### (1) 全体的な成果

#### ①3年で作付面積が3倍に増えた分、耕作放棄地は減った。

農事組合法人高月の作付面積は、平成29年3月時点で水稻210a、畑は里芋20aとニンニク10aと、合計わずか240aで立ち上げた。

令和2年3月計画では水稻560a、里芋30a、ニンニク30a、栗125a、小ネギ20a、ミニパプリカ5aで合計770aに増加。

#### ②地域の農地をみんなで守る気持ちが高まった。その姿が、会社を退職して法人に就職する新規就農者を引き寄せた。

法人は65歳と67歳がメインで、あとは70～80代だが、地元に住む40歳男性(元会社員)を、令和2年4月から雇用する。「地域のために頑張る法人を加勢したい」と、会社を辞めて、熊本県立農業大学の新規就農者支援研修生(プロコース)で1年間勉強。当地区にとって、この1名の新規就農の意味は大きい。

#### ③小ネギの作付はハウスを作り、平成31年度に20aへ。

令和2年3月から収入が見込め、人材雇用への期待が高まる。

小ネギのハウスを設置した。米専用の保冷庫で保管すれば、年間安定供給できる。小ネギは割と収量があり、軽いため高齢者や女性でもできる。ハウスで周年栽培ができる

#### ④トラクターやコンバイン等を購入できた。

コンバイン、トラクター、田植機、ブロードキャスター、小ネギ皮むき機(エアと水を使用)、コンプレッサー、乗用草刈り機、機械倉庫、米貯蔵庫、管理機など共同購入。

#### ⑤フットパスおよび大収穫祭は毎年好評で、参加者も増加傾向にある。地域一丸となって、団結力が増した。

フットパスは町外の参加者が多いので、地蔵88か所巡りも合わせてコースを作り、観光資源化。外輪山や阿蘇谷を眺め、みんな感動している。

フットパスのランチと合同で、毎年11月23日に大収穫祭を開催。参加料2500円で定員20名を25名に増やした。好評のため令和2年は30名に増やせないかと相談されている。





## (2) 今後の展開方向

### ①新規作物の導入時の栽培技術を確立させる。

新規作物を導入すれば収益も上がるとわかっているにもかかわらず、導入そのものがそう簡単なものではない。特に栽培技術が確立するまでには試行錯誤が続き、時間と労働力がかかる。栽培技術の確立をいかにスムーズに実現できるかが重要である。

### ②5年後には水田管理はほとんど法人がやることになるのではないか。今、後継者は20代2名以外、40～50代以上。

高齢化と後継者不足はさらに進むと考えられ、条件の悪い地区では、個人での農業維持、特に水田管理は非常に厳しくなるとされる。雇用力の向上も含め、法人の機能をいかに高めていくのが大きな課題になる。

